

中村光夫全集

第二卷

# 中村光夫全集

第二卷

筑摩書房

中村光夫全集 第二卷  
昭和四十七年一月十五日発行

著 者 中 村 光 夫

発行者 竹之内静雄  
東京都千代田区神田小川町二ノ八

発行所 筑摩書房  
東京都千代田区神田小川町二ノ八

郵便番号 一〇一一九一  
電話 東京 七六五一(代表)  
振替 東京 四一 二二三  
印刷 株式会社 精興社  
製本 牧製本株式会社

落丁・乱丁本はお取替いたします

(分類) 1395 (製品) 72502 (出版社) 4604

第二卷目次

二葉亭四迷伝

序	5
名古屋と松江	16
ロシア語とロシア文学	29
二つの偶然	42
浮雲の制作	52
浮雲の矛盾	64
浮雲の中絶	77
文学拋棄	90
官報局	105
結婚	116
片恋の出版	131
外国語学校教授	146

モウパッサンの道	443
＊	
あとがき	441
新版序	437
後記	432
II ギニスタフ・フロオベル	307
I ギイ・ド・モウパッサン	257
フロオベルとモウパッサン	
あとがき	254
ペテルスブルグ	237
戦後のロシアへ	221
平凡	203
其面影	186
日露戦争	172
ハルビンから北京へ	158

モウパッサン・作家と作品	452
「女の一生」	487
「死の如く強し」	504
「ベラミ」	511
「男ごころ」	517
モウパッサンと日本	520
*	
フロオベル	523
「フロオベル集」解説	528
フロオベル・ベスト・スリー	538
「ボヴァリイ夫人」Ⅰ	540
「ボヴァリイ夫人」Ⅱ	545
「三つの物語」	553
「ジョルジュ・サンドへの書簡」	555
「フロオベル書簡集」	571
フロオベルの住居	574

「ボヴァーリイ夫人」の翻訳 ..... 577

解説 ..... 小田切秀雄 ..... 581

解題 ..... 593

二葉亭四迷（二）





二葉亭四迷伝

刀を鳥に加へて鳥の血を悲めども、魚に加へて魚の血を悲まず。  
声ある者は幸福也。今のいはゆる詩人は幸福也。

—— 斎藤緑雨

## 序

この五月十日に僕は染井にある二葉亭の墓をたづねました。ふだんは彼の命日をとくに氣にかけたことはないのですが、この日の墓詣りは、今年のはじめから心がけてゐました。

彼が命をへた四十六歳といふ齡に、今年僕もなつたからで、この記念すべき命日に彼の墓に行かうといふ都合の欲求のためです。

二葉亭の墓は彼の十三回忌をすぎてから、外語時代の同窓を中心とする旧友たちが建てたもので、子供たちに「即時学校をやめ奉公に出づべし」と遺言して死んだ彼にしては不似合に立派なものです。家族と孤立してひとりだけのせるか、今では參詣者もないやうで、豊島区役所がたてた間違ひだらけの立札が入口にあるきりです。たけの高いくろずんだ碑面に対しながら、明日から彼より年上になるといふ日に考へたことをここで述べる必要はありません。かういふ場合に催す感慨は、第三者には無意味な滑稽としか映らぬのが普通です。ただそのなかで自分にも彼の伝記をかく資格ができたし、また書かねばならぬときがきたのではないかと思つただけは、この仕事に関係がありません。

僕が二葉亭に親しんだのは学生時代からで、ときどきは疎遠になりながら、ずるぶん長いつきあひなのですが、むかしは伯父さんぐらゐのつもりでゐた彼が、いつのまにか自分より若死にした人になつてしまつたといふ事實は、一面においては彼と別れるときがきたのを意味します。この天才と同じ長さの年月を生きて、自分の凡庸が決定的になつたといふことだけでなく、今後かりに僕が長生きしたとしても、年が経つにつれて、彼は年齢的にも僕とは距つた存在になつて行くばかりです。

その代りに今ならば、ことによると彼の生涯を鳥瞰できるかも知れません。僕はこれまで、二度ほど彼の伝記

を書きかけて止めたことがあります。今度は少なくとも彼の生涯にぶつかつたいろいろな問題について年長者としての意見が持てる筈です。

鷗外はシュニツラーだかを訳しながら、自分の方が年上だからね、といったさうですが、僕は彼より年上になつたのが、まだ利点であり得るあひだに、二葉亭にたいする長いあひだの負ひ目をはたさうと思ひます。

二葉亭は死の前年にロシアにゆくとき、彼の健康がすぐれぬのを危んだ矢崎鎮四郎に、「僕は人に何らか模範を示したい……なるほど、人間といふ者はあゝいふ風に働く者かといふ事を、出来はしまいが、世人に知らせたい。」と云つたさうです。

これは一方において極端な謙遜家であつた彼が、半生の失敗の連続にかかはらず、彼の生き方に、根柢でどんな自信を持つてゐたかを示す、興味ある言葉ですが、彼の作品は、不幸にして、これらの「働き」についてほとんど何もつたへません。彼の作品が、私小説的な性格を持たぬためでもあり、また彼自身が文学表現に絶望してゐたためでもあります。その結果、彼の作品は、彼の生活、思想の表現としてはなほ物足りぬものになつてゐます。

むろん或る人の行為や思考を完全に表現した文学などはあり得ないでせう。しかし多くの文学者の場合、彼の生活はその作品を生むための手段あるひは素材であり、その想像力の所産にくらべて、実生活は無味単調に思はれるのが原則ですが、二葉亭にあつては、彼の文学者としての業績は、その生活の「働き」の色あせた反映にすぎないのです。

彼は自らもみとめた通り文学者ではなかつたと、たしかに或る見地からは云へるので、作家とは終生刻苦勉強して小説の書きかたに習熟し、そのことによつて人生への観察を深めて行く職業だとすれば、彼は文学者としてもたしかに惜しい素質を台無しにした失敗者のひとりです。「二葉亭氏の物を見る力は早く発達したらしい。『浮雲』はこれを証して居る。」といつた藤村が『平凡』は破壊されて行く精神の可憐いたはしい形見である。」と付け加へてゐるのは、この点をさしてゐます。

生涯を机のまへに端坐して、人生にたいする膝もくづさなかつたこの作家の眼には、「文学にたづさはるの愚かさを嘲り笑ひながら、非常に苦心した文章を書いた先輩は、自分と人生に甘えた馬鹿者とししか映らなかつたでせう。

しかし文学において失敗者として終つたやうに、政治家としても実業家としても新聞記者としても教育家としてもつひに見るべき業績をのこさなかつた二葉亭が、明治といふ不思議な過渡期の孕んだ理想の悲劇的体现者であつただけは、どう譲歩しても云へるので、彼の生涯は明治といふ時代精神の演じた悲劇なのです。彼の失敗はそれぞれの領域で、明治といふ時代がその出発点において目指したことで、実現し得たところとの落差を象徴してゐます。

明治人にとつて最高の社会道徳であり、同時に事物の価値をはかる尺度になつたのは「成功」といふことです。文壇もその例外ではなかつたので、かういふ時代に人並よりすぐれた才能にめぐまれ、それを自覚しながら失敗者として生きるのは、特殊な氣質の持主でなければできないことで、たんなる氣紛れや他人からうけた思想の影響で説明のつくことではありません。

二葉亭自身も失敗したくて失敗したのではないのです。彼自身がある意味では成功できない人間は意気地なしだとする時代の道徳の支配をうけてゐただけでなく、名古屋人氣質の母親をはじめ、自ら責めるまへに彼の非をならす家族たちにも事欠かなかつたからです。

また彼は実生活の失敗はそれを芸術に表現することで救はれるといふ同時代の作家と共通したロマンチズムも持ちませんでした。「北村君にせよ、国木田君にせよ、すくなくも自己を語ることが出来た。二葉亭氏となる」と、殆んど自己を語ることすら出来なかつたかと思はれる。」と藤村は云ひます。

彼にとつて失敗とは単にくりかへししたくない時間と精力の浪費であり、このとりかへしのつかぬ浪費のうちに彼の一生は流れ去つたのですが、これらの失敗がいづれも内田魯庵の言葉をかりれば「理想負け」であり、彼の

内面の論理と現実の理法との衝突を主要な原因としてゐたとすれば、彼の失敗は、その生活をかけた同時代への批判であつたと云へます。

彼が生かさうと試みた理想は——たんに文学の領域を例にとつても——明治といふ時代が抱くことを許したかぎりの最も美しいものであり、他のどの同時代人のものよりも、僕等に深く語りかけるからです。

むしろ彼はこのやうな態度を意識して生活したのではありません。彼の性格の一部には正宗白鳥の云ふやうに、「愚図」で一本気なところがあり、アイロニーとシニスムは彼のもつとも嫌悪するところです。漱石が一度の対面で見抜いたやうに、彼は政治家臭くない政治家、教師くさくない教師、更に文士くさくない文学者、一口に云へばまともな人間として生きたので、専門化と、適合主義を両軸として形成された明治の知識階級の間で、彼がどこへ行つても所を得ぬ存在であつたのはこのためです。

彼の遺した文学作品は、かうした彼の生涯の正確な証言の役割を果すものであつても、表現に達してゐるとは云へないので、作者からはなれては、その真に意味するところは理解できないのです。

「浮雲」や「其面影」は当時の文学界を背景として見れば、それぞれにすぐれた小説であり、ことに「浮雲」は未完に終つた不具の形のまま、我國の近代小説史の扉を開く役割になつてゐます。

しかし作者がこの小説に盛つた夢や野望がどのやうなものであり、現代から見るとどういふ意味を持つかは、幸ひ僕等の手にのこされた他の資料によらなければ正確に推察することは決してできないので、ここに「浮雲」が彼自身の眼から失敗作であり、文学そのものが彼にとつてひとつの失敗であつた所以があります。

したがつて二葉亭の作品を論ずることは、彼の生活を描くことなしに不可能であり、また彼の生活の内面への手がかりはその作品以外にないので、この両者の触れあひから、彼の精神の「働く」姿を見究めるには伝記といふ形式が一番適當なのです。ここで僕が目指すのは、彼が持前の氣質から演じた多くの領野での失敗の意味の究明であり、彼の生活の些事の詮索ではありません。

「私は御承知の通り愛知の人間だが、生れたのは東京さ。即ち当地の尾張邸。然うだ、今士官学校になつてゐる彼処で生れた……七歳、八歳まで彼処で育つた。で、維新の騒ぎの光景も多少は幽かに記憶えてゐる。……最少し成長オホナリくなつてからだが、これで私なども髻オビを結つて一本帯したもののさ。」（酒余茶間）と彼は晩年に発表されたある談話で云ひます。この短い座談は彼の幼時の環境や心情を、断片的ながら僕等にうかがはせてくれる、ほとんど唯一の資料です。

彼の父は長谷川吉数（三）（通称岩蔵）といふ尾州藩の下級藩士で、文久二年六月に御鷹場吟味役といふ職につき、江戸市ヶ谷の藩邸に定詰を命じられてゐます。彼が江戸に住むやうになつたのはその頃からと思はれますが、この御鷹場吟味役といふのは、いつも御鷹狩にお伴する殿様のお氣に入りがなる役であり、今日長谷川家に伝へられるところによると、吉数は美貌の持主であつたために、特にお小姓の列に加へられたといふことです。

「吉数君は快活ヤキヤクな人である。婉転滑脱他人に向つて城府を設けず、而も他人と応接する言葉に言ふに言はれぬ愛嬌が有つて、動もするとその興に乗じた場合などはその愛嬌が趣味有る滑稽と交はりもした」と二葉亭とは父母の時代から知りあひであつた山田美妙がその性格をつたへてゐます。この言葉からも察せられるやうに、吉数は武士といつてもながい間の都会生活に風化されて、その趣味や生活態度などかなり町人風に近かつたので、

「二葉亭のお父さんは尾州藩だつたが、長い間の江戸詰で江戸の御家人化してゐた。お母さんも同じ藩の武家生れたつたが、矢張江戸で育つて江戸風に仕込まれた。両親共に三味線が好きで、殊にお母さんは常磐津が上手で、若い時には晚酌ばんしやくの微酔わいすいにお母さんの絃ことでお父さんが一とくさり語るといふやうな家庭だつたさうだ。」と内田魯庵は二葉亭の直話として書いてゐます。

後年の二葉亭がこの家に長男の辰之助として生れたのは元治元年（一八六四）二月（三）のことで、このとき吉数は二十七歳、母の志津は二十四歳であつたやうです。彼の最初の記憶は祖母に盲愛されたことであり、この世で最



初におそれたのは父と家にある鍾馗の画像であつたさうです。

元治元年といへばすでに明治維新をさるる四年前であり、三月には藤田小四郎等の筑波山での挙兵、八月には英仏米蘭の四国連合艦隊の下関砲撃、第一回長州征伐といふやうな大事件が相ついで起つた年ですが、かうした世情の慌しい動きも、この七石二人分取の御鷹場吟味役の生活には直接何の影響も及ばさなかつたので、今日では東京裁判の行はれた極東軍司令部のある場所にあたる市ヶ谷合羽坂の尾州藩邸の役宅で、晩酌の酔余夫婦が三味線を弄ぶといつた平和な生活は、二葉亭が五歳になるまでは変るところなく続きました。この、今日の東京で云へば山の手より下町の、それも花街に近いやうな家庭の雰囲気は、二葉亭の性格に濃い影響をのこしてゐます。

山田美妙は、さきに引用した文章につづけて、この滑稽好きな父親の気質は、「幼なる辰之助君にその儘植ゑ附けられてあつた」といひ、明治七八年ごろの彼は馬鹿囃子やヒョットコ踊りが得意であつたといつてゐますが、やがて彼がかうした「軽薄な江戸ツ児風」から脱けだして、後の、「真面目なる四迷氏」になつてからも、この「江戸脈」は彼の気質の根柢に深く食ひ入つてゐました。

「二葉亭は江戸ツ子肌であつた。あの敵めしい顔に似合はず、(野暮を任じてゐたが、)粋とか渋いとかいふ好みにも興味を持つてゐて相応に遊蕩もした。」と魯庵はいひ、そこに父親ゆづりの「享楽氣分の血」を見てゐます。坪内逍遙もやはり、二葉亭の趣味は「江戸式しかも何方かと云ふと下町式といふ氣味であつた」といひますが、この両親の感化がもつとも端的に現はれたのは、彼の生涯を通じての俗曲趣味です。

彼が学生時代に、そのころ寄席にでゐた鶴賀若辰といふ盲目の老婆の新内語りをひいきにして、酔ふとよくその真似をしてゐたといふ挿話を外語時代にでゐた友人がこぞつて回想してゐますが、後に家を持つてからも、近所に氣に入つた清元の師匠などがゐると、ときどき垣根の外へその節まはしを聞きに行つたといふことです。

彼が「小説総論」で芸術的認識の例として清元と常磐津の違いをひいてゐるのも、かうした平素の好尚の現はれと思はれますが、さらに晩年に発表した随筆「そゞろ言」「平凡」の第五十三章、「酒余茶間」のなかの「邦楽論」などで、この一生を貫いた柄にない趣味にたいして、彼なりの意味づけをあたへてゐます。